

源氏物語(下卷)

校註

日本文學大系

第七卷

昭和二年四月十七日 印刷
昭和二年四月二十日 發行
昭和二年十一月五日 再版發行
昭和四年九月五日 三版發行

(非賣品)

日本文學系

第七卷

編輯者兼
發行者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

右代表者

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

中塚榮次郎

印刷者

東京市本所區番場町四番地

井上源之丞

印刷所

東京市本所區番場町四番地

凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座(57)

振替東京五二二九八番

七三三番
二一八番
三六八番
三八八番

例言

一、本卷は源氏物語下巻として若菜上から夢浮橋までを収めました。

一、本卷は沼波守が擔當しました。

一、本文は首書源氏物語をもととして、源氏物語評釋、源氏物語玉の小櫛等を参照校訂し、又頭註は、評釋岷江入楚、湖月抄、玉の小櫛等を参考しました。

一、巻尾に、沼波守執筆の源氏物語各巻梗概と、その創案になる、源氏物語各巻系圖及び、從來源氏物語研究者の指針となつて居る北村久備のすみれ草全部を添へました。

校註
日本文學大系 第七卷目次

源氏物語下卷(自若葉上至夢浮橋)……………一八五

源氏物語各卷梗概……………沼 波 守……………卷尾 一—六

源氏物語各卷系圖……………沼 波 守……………同 五—五

すみれ草……………同 五—三七

源氏物語下卷目次

目

若	菜(上)	三
若	菜(下)	八九
柏	木	一七三
横	笛	二〇七
鈴	蟲	二二三
夕	霧	二三六
御	法	二九五
幻		三一
雲	隱	三三〇
勻	宮	三三一
紅	梅	三四三

竹河	三五四
橋姬	三九〇
椎木	四二二
總角	四五四
早蕨	五二八
宿木	五四四
東屋	六二二
浮舟	六七六
蜻蛉	七三五
手習	七八二
夢浮橋	八三九

- 源氏三十九歳から四十一歳までの事。
- ありし行幸 藤裏葉にある六條院への行幸の事。
- あつしく 病がち
- 後の宮 母弘徽殿の太后。此の母后崩御の事こゝに始めてかく。
- その方 出家の方
- 四所 女一の宮、落葉の宮、女三の宮、女四の宮。
- 藤壺 薄雲女院藤壺の妹。
- また坊主 朱雀院が。
- 高き位 皇后の位
- 母方 藤壺の母方
- 太后の 弘徽殿太后が。
- 尙侍 藤月夜。

源氏物語下卷(自若菜至夢浮橋)

若菜上

朱雀院の帝みかど、ありし行幸みゆきの後、その頃ほひより、例ならず惱み渡らせ給ふ。もとよりあつしくおはします中に、此の度は物心ほそくおほしめされて、朱雀院年頃も行ひの本意ほんい深きを、後の宮のおはしましたる程は、よろづ憚り聞えさせ給ひて、今までおほし滞りつるを、なほその方かたに催すにやあらむ、世に久しかるまじき心地なむする。」など宣はせて、さるべき御心まうけどもせさせ給ふ。御子達みこたちは東宮をおき奉りて、女宮達むすめたちなむ四所よつこおはしましける。その中に、藤壺と聞えしは、先帝せんたての源氏にぞおはしましたしける、まだ坊はやくと聞えさせし時参り給ひて、高き位にも定まり給ふべかりし人の、とり立てたる御後見おんうしろみもおはせず、母方もその筋となく物はかなき更衣腹にてもし給ひければ、御まじらひの程も心細けにて、太后おほききの尙侍なむしのかみを参らせ奉り給ひて、傍に並ぶ人なくもてなし聞え給ひなどせし程に、

- 帝 朱雀院。
- いとほしきものに
藤壺を。
- かひなく口惜しく
て 藤壺が。
- かなしきもの 可
愛いもの。
- 今はさ 朱雀院の
御心中をいふ。
- たちごまりて 女
三の宮が。
- うしろめたく 氣
がまりに。
- 西山なる御寺 仁
和寺。
- はかなき御遊物
つまらない御遊物。
- 御處分 御讓與。
- 東宮 後に今上と
申す、朱雀院の一の
皇子。
- かかる御惱み 朱
雀院が。
- 母女御 承香殿の
女御、髥黒の妹。

けおされて、帝も御心の中にいとほしきものに思ひ聞えさせ給ひながら、おりるさせ給ひにしかば、かひなく口惜しくて、世の中を怨みたるやうにて亡せ給ひにし、その御腹の女三の宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきものに、思ひかしづき聞え給ふ。その程御年十三四ばかりにおはす。今はと背きすて、山籠りしなむ後の世にたちとまりて、誰を頼むかけにて物し給はむとすらむと、唯この御事をうしろめたく思し歎く。西山なる御寺造りはてて、うつろはせ給はむほどの御いそぎをせさせ給ふに添へて、又この宮の御裳著のことおほし急がせ給ふ。院の内にやんごとなくおほす御寶物、御調度どもをば更にもいはず、はかなき御遊物まで、少し故あるかぎりをば、たゞこの御方にと渡し奉らせ給ひて、その次々をなむ、他御子達には、御處分どもありける。

東宮は、かかる御惱みに添へて、世をそむかせ給ふべき御心づかひになむと聞かせ給ひて、渡らせ給へり。母女御も添ひ聞えさせ給ひて、参り給へり。勝れたる御覺えにしもあらざりしかど、宮のかくておはします御宿世の、限りなくめでたければ、年頃の御物語、細やかに聞えかはさせ給ひけり。宮にもよろづの事、世を保ち給はむ御心づかひなど、聞え知らせ給ふ。御年の程よりは、いとよく大人びさせ給ひて、御後見どもも此方彼方、輕

- さらぬ別れ 避け難い別れ即ち死別。
- 心より外に 思ひの外に。
- いづれをも どの姫宮をも。
- 思ふやうならむ御世 東宮が帝におなりになつた時代。
- さる方にも 其の後見の人にも。
- 只一人を 父君朱雀院御一人を。
- 女御にも 承香殿
- 母女御の 女三の宮の母藤遊。
- にくしはなくとも 承香殿が女三の宮を。
- この御事 女三の宮の事。
- 御惱み 朱雀院の御氣。

輕しからぬ中らひにもし給へば、いとうしろやすく思ひ聞えさせ給ふ。朱雀「この世に怨み残ることも侍らず。女宮達のあまた残りともまる行くさきを思ひやるなむ、さらぬ別れにもほだしなりぬべかりける。さきく、人の上に見聞きしにも、女は心より外にあはあはしく、人に貶しめらる、宿世あるなむ。いと口惜しく悲しき。いづれをも、思ふやうならむ御世には、様々につけて、御心とめておほし尋ねよ。その中に、後見などあるは、さる方にも思ひゆづり侍り。三の宮なむ、いはけなきよはひにて、只一人を頼もしきものとならひて、うち捨てむ後の世に、漂ひさすらへむこと、いとうしろめたく悲しく侍り。」と、御目おし拭ひつゝ、聞え知らせ給ふ。女御にも、心美しきさまに聞えつけさせ給ふ。されど、母女御の、人よりは優りて時めき給ひしに、みな挑みかはし給ひし程、御中らひども、え麗はしからざりしかば、そのなごりにて、けに今はわざとにくしとはなくとも、まことに心とめて思ひ後見むとまでは思さずもやとぞ、推し量らるゝかし。

朝夕にこの御事をおほしなけきて、年暮れ行く儘に、御惱みまことに重くなりまさらせ給ひて、御簾の外にも出でさせ給はず。御物怪にて、時々惱ませ給ふこともありつれど、いと斯くうちへ、小歇なき様にはおはしまさざりつるを、このたびはなほ限りなりと、

○その世に 朱雀院御在位の時代に。

○頼みそめ奉り給へる人々 御奉公申し上りたる人々。

○六條の院 源氏。

○院は 朱雀院は。

○中納言の君 夕霧

○故院 桐壺帝。

○この院の御事 六條院(源氏)の御事。

○今の内裏 冷泉院

○おほやけとなりて 朱雀院が御即位になつて。

○はかなき事のあやまり 朧月夜の事によつて源氏の左遷された事。

○その御心はへ綻ぶべからむ 源氏の根が現はれるたらう

○限りなく 非常に嬉しく。

思召したり。御位を去らせ給へれど、なほその世に頼みそめ奉り給へる人々は、今も懐かしくめでたき御有様を、心やり所に参り仕う奉らせ給ふかぎりには、心を盡して惜しみ聞え給ふ。六條の院よりも、御訪らひしばゝあり。自らも参り給ふべき由聞召して、院はいといたく喜び聞えさせ給ふ。中納言の君参り給へるを、御簾の内に召し入れて、御物語細やかなり。朱雀「故院」の上の、今はのきざみに、あまた御遺言ありし中に、この院の御事、今の内裏の御事なむ、とりわきて宣ひおきしを、おほやけとなりて、事限りありければ、内々の心よせは變らずながら、はかなき事のあやまりに、心おかれ奉ることもありけむと思ふを、年頃事にふれて、その怨み残し給へる氣色をなむ漏らし給はぬ。さかしき人といへど、身の上になりぬれば、こと違ひて心動き、必ずその報い見え、ゆがめることなむ、古だに多かりける。如何ならむをりにか、その御心ばへ綻ぶべからむと、世の人もおもむけ疑ひけるを、遂に忍びすぐし給ひて、東宮などにも心をよせ聞え給ふ。今はた又なく親しかるべき中となり、睦びかはし給へるも、限りなく心には思ひながら、本性の愚かなるに添へて、子の道の闇に立ちまじり、頑なる様にやとて、なか／＼餘所のことに聞え放ちたる様にてはべる。内裏の御事は、かの御遺言違へず、仕う奉りおきてしかば、かく末

○來し方の御面をおこし給ふ。朱雀が我が御世の事を卑下して仰せられるのだ。○この秋の行幸、藤裏葉の行幸の事。○年まかり入りはべりて、夕霧が成人の後。

○さるべき物語、源氏この物語。

○うちかすめ、ほんやり勻はず。

○かく朝廷の、貝下「月日を過す事」まで源氏の詞を夕霧が云ふ。

○御位におはしましし世、朱雀が。

○所狭き身、窮屈な身、源氏太上天皇であるから。

○二十にもまた夕霧今年十八歳。

○御目にさめて、朱雀院が。

○若

の世の明らかき君として、來し方の御面をおこし給ふ。本意のごと、いと嬉しくなむ。この秋の行幸の後、古のこととり添へて、ゆかしく覺束なくなむ覺えたまふ。對面に聞のべき事どもはべり。必ず自ら訪らひものし給ふべきよし、催し申し給へ。」など、うちしほたれつ、宣はず。中納言の君、夕霧過ぎはべりにけむ方は、ともかくも思う給へわき難くはべり。年まかり入りはべりて、朝廷にも仕うまつりはべる間、世の中の事を見給へまかりありく程には、大小のことにつけても、内々のさるべき物語などのついでにも、源氏古の憂はしき事ありてなむ。」など、うちかすめ申さる、折ははべらすなむ。源氏かく朝廷の御後見を仕う奉りさして、靜かなる思ひをかなへむと、ひとへに籠り居し後は、何事をも知らぬ様にて、故院の御遺言のこともえ仕う奉らず。御位におはしましし世には、齡のほども、身の器物も及ばず、かしこき上の人々多くて、その志を遂けて、御覽ぜらるゝ事もなかりき。今かく政をさりて、靜かにおはします頃ほひ、心の中をも隔てなく、まゐり承らまほしきを、さすがに何となく所狭き身のよそほひにて、おのづから月日をすぐす事。」となむ、折々歎き申し給ふ。」など奏し給ふ。二十にもまだ僅かなるほどなれど、いとよく整ひすぐして、容貌も盛りに勻ひて、いみじく清らなるを、御目にとめて、打ちまもらせ給

○もて煩はせたまふ
姫宮 女三の宮。

○これをや「これ」
は夕霧をさす。

○太政大臣のわたり

雲井扇をさす。

○心得ぬさまに夕

霧と雲井扇との間を

○思ひ廻らす夕霧

○はかなくしくも侍

らぬ身 云ひ申斐な

い私の身。

○のぞきて見聞えて

のぞいて夕霧を見

て。

○老いしらへるひ

さく年老いた人。

○かの院 源氏。

○い目もあやに

源氏がこの夕霧位の

年の頃は。

○彼は 源氏。

ひつゝ、このもて煩はせたまふ姫宮の御後見おのうしろみにこれをやなど、人知れずおほし寄りけり。朱雀「太政大臣おほきおとのわたりに、今は住みつかれたりとな。年頃心得ぬさまに聞きしが、いとほしかりしを、耳やすき物から、さすがに妬く思ふ事こそあれ。」と、宣はする御氣色を、如何に宣はする事にかと、怪しく思ひ廻らすに、この姫宮をかくおほしあつかひて、さるべき人あらば預けて、心安く世をも思ひ離ればやとなむ、おもほし宣はすると、自らおのづかれ聞き給ふ便りありければ、さやうの筋にやとは思ひ寄れど、ふと心得顔にも何にかはいらへ聞えさせむ。たゞ、夕ゆふはかなくしくも侍らぬ身には、寄るべも侍ひがたくのみなむ。」とばかり、奏して止みぬ。女房などは、のぞきて見聞えて、「いと有り難くも見え給ふ容貌かたち用意かな。あなめでた。」など集まりて聞ゆるを、老いしらへるは、「いで、然りとも、かの院のかばかりにおはせし御有様みさまには、えなすらひ聞え給はざめり。いと目もあやにこそ清らに物し給ひしか。」など、言ひしろふを聞召きこしめして、朱雀「まことに、彼はいと様異さまなりし人ぞかし。今はまたその世にもねびまさりて、光るとはこれを言ふべきにやと見ゆる匂ひなむいと々加はりにたる。うるはしだちて、はかなくしき方に見れば、厳いづくしくあざやかに、目も及ばぬ心地するを、また打解けて、たはぶれ言をも言ひ亂れ遊べば、その方につけて

- 世にありがたけれ
世に稀だ。
- 前の世 源氏の前
世の善根。
- 帝王の 帝王(桐
壺帝)が。
- 限りなくかなしき
者 源氏を。
- 一つあまりてや
二十一であつたか。
- 宰相 參議。
- これは 夕霧は。
- をさく 餘り。
- あやまりても 假
に他の長所がないこ
しても。
- 片生ひ 不足な育
て方。
- 六條の大臣 源氏
- 式部卿の親王の女
紫の上。
- はぐ、まむ 育て
る。
- 中宮 秋好中宮。
- はかしくしき後見
なくて 女三の宮を
内裏に差上げたこと
ろで。
- 一人ありつる程
獨身であつた時。

は、似るものなく愛敬^{あいぎやう}つき、なつかしく美しき事のならば無きこそ、世にありがたけれ。何事にも前の世推し量られて、珍らかなる人の有様なり。宮の内におひ出でて、帝王の限りなくかなしき者にし給ひ、さばかり撫でかしづき、身にかへておほしたりしかど、心のまゝにも驕らず卑下して、二十がうちには、納言にもならずなりにきかし。一つあまりてや、宰相にて大將かけ給へりけむ。それにこれは、いとこよなく進みにためるは、次々の子の覺えのまさるなめりかし。まことに賢しきかたの才心もちるなどは、これもをさく劣るまじく、あやまりてもおよすけ勝りたるおほえ、いと異なめり。」などめでさせ給ふ。

姫宮のいと美しけにて、若くなに心なき御有様なるを見奉り給ふにも、朱雀「見はやし奉り、かつは又片生ひならむ事をば、見隠し教へ聞えつべからむ人の、うしろやすからむにあづけ聞えばや。」など聞え給ふ。大人しき御乳母ども召し出でて、御裳著の程の事など宣はする序に、朱雀「六條の大臣の、式部卿の親王の女おほし立てけむやうに、この宮を預りてはぐ、まむ人もがな。たゞ人の中にはありがたし。内裏には中宮さぶらひ給ふ。次々の女御達とても、いとやんどなき限りものせらるゝに、はかしくしき後見なくて、さやうの交際いとなかくならむ。この權中納言の朝臣の一人ありつる程に、打ちかすめてこそ

○まめ人 眞面目な人。

○かのわたり 雲井

鷹。

○かの院 源氏。

○如何なるに 如何なる女。

○前齋院 槿の事。

○あたけ あたなる氣、浮氣。

○數多の中に 源氏の數多の妻妾の中に

○親さまに定めたるにて 源氏を親と

して。

○かの人の 源氏の

○さばかり 源氏の

やうに。

○かんの君 麗月夜

○この御後見 女三

の宮の御後見。

試みるべかりけれ。若けれどいと警策きやうさくに、生ひ先たのもしけなる人にぞあめるを。」と宣はす。女房中納言は、もとよりのまめ人にて、年頃もかのわたりに心をかけて、外様ほかさまに思ひうつろふべくもはべらざりけるに、その思ひ叶ひては、いと動ゆるぐ方はべらじ。かの院こそ、なか／＼なほ、如何なるにつけても、人をゆかしくおほしたる心は、絶えずものせさせ給ふなれ。その中にも、やんごとなき御願みかんひ深くて、前齋院ぜんさいいんなどを、今に忘れがたくこそ聞え給ふなれ。」と申す。朱雀すずけいで、その古りせぬあだけこそは、いとうしろめたけれ。」とは宣はすれど、けに數多の中にか、づらひて、めざましかるべき思ひはありとも、なほやがて親さまに定めたるにて、さもや譲り置き聞えましましなども思召すべし。朱雀すずけまこと、すこしも世づきてあらせむとおもはむ女子持むすめもちたらば、同じくばかの人のあたりにこそは、觸ればはせまほしけれ。幾許いくばくならぬこの世の間は、さばかり心ゆく有様にてこそ、すぐさまほしけれ。われ女むすめならば、同じ兄弟はなむすなりとも、必ず睦なごみび寄りなまし。若かりし時など、然さなむ覺えし。まして女むすめのあざむかれむは、いと理ことわりぞや。」と宣はせて、御心みこころの中に、かんの君の御事も思し出でらるべし。

この御後見みうしろみどもの中に、重々おもくしき御乳母おんめのとの兄やうと、左中辨さちゆうべんなる、かの院の親しき人にて、年

○この宮にも 女三の宮にも。
 ○参りたるに 左中辨が。
 ○上なむ 「上」は朱雀院。
 ○御子達 皇女達。
 ○また真心に思ひ聞え 女三の宮を。
 ○思ひの外の事 戀愛事件など。
 ○御覽する世に 朱雀の御存命中に。
 ○この御事 女三の宮の御身の上。
 ○數多の御中に 多くの皇女達の中に。
 ○取りわき 女三の宮を特別に。
 ○院は 源氏。
 ○一方なめれば 紫の上一人であるから
 ○それに事よりて 榮華は紫の上に集まつて。
 ○さやうにおはします 女三の宮が源氏に預けられる。

頃仕う奉るありけり。この宮にも心よせことにて侍へば、参りたるにあひて、物語するついでに、乳母「上なむしか。御氣色ありて聞え給ひしを、かの院に、折あらば漏らし聞えさせ給へ。御子達は獨りおはしますこそは例の事なれど、様々につけて心よせ奉り、何事につけても御後見し給ふ人あるは頼もしけなり。上を措き奉りて、また真心に思ひ聞え給ふべき人もなければ、おのれは仕うまつるとても、何ばかりの宮仕にかあらむ。我が心ひとつにしもあらで、自ら思ひの外の事もおはしまし、輕々しき聞えもあらむときには、如何様にかは煩はしからむ。御覽する世に、ともかくもこの御事定まりたらば、仕う奉りよくなむあるべき。かしこきすぢと聞ゆれど、女はいと宿世定め難く坐すものなれば、よろづに歎かしく、數多の御中に、取りわききこえさせ給ふにつけても、人の嫉みあべかめるを、いかで塵もする奉らじ。」と語らふに、辨、左中辨「いかなるべき御事にかあらむ、院は、怪しきまで御心ながく、假にても見せめ給へる人は、御心とゞめたるをも、又さしも深からざりけるをも、方々につけて尋ね取り給ひつゝ、數多つどへ聞え給へれど、やんごとなくおほしたるは、限りありて、一方なめれば、それに事よりて、かひなげなる住居し給ふ方々こそは多かめるを、御宿世ありて、若しさやうにおはします様もあらば、いみ

○いみじき人 紫の上。

○この世の榮え以下「飽かぬ事もある。」まで源氏の常の詞を辨が語るのだ。

○人のもごき 他人からの非難。

○御蔭に隠し給へる人 保護してゐる女達。

○然もおはしませ給はば 女三の宮が源氏にし給はば。

○某の朝臣 左中辨

○かゝづらひ思ふ人 愛する女達。

○御後見望み給ふ人 女三の宮の後見たる事を望む人。

○朗らか 心の賢きさま。

じき人と聞ゆとも、立ち並びておしたち給ふことはえあらじとこそは推し量らるれど、なほ如何と憚らるゝ事ありてなむおほゆる。さるは、源「この世の榮え末の世に過ぎて、身心もとなきことはなきを、女のすぢにてなむ、人のもどきをも負ひ、我が心にも飽かぬ事もある。」となむ、常に内々のすさびごとにも思し宣はすなるに、けに己等が見奉るにも、然なむおはします。方々につけて御蔭に隠し給へる人、皆その人ならず立ち下れるきはには物し給はねど、限りあるたゞ人どもにて、院の御有様に並びべきおほえ具したるやはおはすめる。それに、同じくは、けに然もおはしませば、いかにたぐひたる御間ならむ。」と語らふを、乳母又ことのついでに、乳母「云々なむ某の朝臣にほのめかし侍りしかば、かの院には必ずうけひき申させ給ひてむ、「年頃の御本意かなひておほしぬべき事なるを、此方の御ゆるし誠にありぬべくば傳へ聞えむ。」となむ申しはべりし。いかなるべき事にかはべらむ。程々につけて、人のきはくおほしわきまへつゝ、あり難き御心様にもやし給ふなれど、たゞ人だに、又かゝづらひ思ふ人立ち並びたる事は、人の飽かぬことにし侍るめるを、めざましきこともやはべらむ。御後見望み給ふ人々は、數多ものし給ふめり。よく思召し定めてこそよくはべらめ。限りなき人と聞ゆれど、今の世のやうとては、皆朗らか